

第3分科会「キーワードは『本気』 モルモットを飼育した一年間」

齋藤岳史

1 戸部小学校における生活科の位置づけ

(1) 学習体制と活動環境

本校は、横浜市の中心部に位置し、今年創立130周年をむかえた古くから地域に根ざした伝統校である。親子三代で同居している家庭もあり、本校を卒業した保護者や学校とかかわってきた人もたくさんいる。そのため、学校の教育活動に対する関心は高く、協力的である。

学区は住宅地が中心であるが、1年生でも1時間の授業時間内に行って帰ってこられる掃部山公園や御所山公園など緑豊かな公園が近隣にあり、子どもたちは都会の中にある自然にふれ親しんできた。また、学区域周辺には、横浜市中央図書館、野毛山動物園、神奈川県立青少年センター、よこはま美術館、三菱みどりみらい技術館などがあり、こうした恵まれた環境を生かして、本校の各教科や「総合的な学習の時間」、特別活動などで各社会教育施設とかかわってきた実績もある。

本校では、平成15年度から「学びを創りだす子ども」の育成を目指して、「総合的な学習の時間（以下「総合的な学習」とする）」・生活科の研究に取り組んでいる。「学びを創りだす子ども」とは、「自然や社会などの学びの対象とのかかわりの中から、自分の問題をもち、かかわりを深めながら追究し、よりよい解決にむけて自分の活動を振り返る子ども」であり、「このような解決に向けての活動を通して、ものの見方や考え方を深めたり広げたりし、自分の考えを創っていく子ども」である、と考えている。そして、この学習過程のなかで、「子どもの活動や意識が、大きく変容したり深まったりするところ」を「学びどころ」とし、こうした「学びどころ」のある授業を教師が意図的につくり出すために予め準備できる手立てを「しきけ」と呼んで、「学びを創りだす子ども」を育てるための1時間を見通した単元づくりと、「学びどころ」のある1時間の授業づくりを行っている。本校の「総合的な学習」・生活科の特徴として、以下の3点があげられる。

①クラスごとに単元が立ち上がり、1年間活



動を継続していく。1年間活動を継続していくなかで、学習の日常化が図られ、子どもたちが本気になって取り組むようになる。

②生活のなかからでた子どもたちの思いや願い、教師の意図などから学習材が選定され、単元が立ち上がる。また、学習の方向性も子どもたちの話し合いのなかから決定されることが多い。

③活動→話し合いによる学習のふりかえり→次の活動へという一連の流れがある。

総合的な学習では、活動中に起きた問題や突き当たった課題に対して、自己の経験や他人の知恵を活用して解決にあたる活動が大切である。そして、学習材に継続的にかかわっていくことで、課題解決にむけた活動を繰り返し行い、学習活動を深めていくのである。

本校では、総合的な学習は3年生に進級してからいきなり始まるのではなく、1・2年生で学習してきた生活科をベースとしてスタートする、ととらえている。それは、生活科と総合的な学習の類似性、連続性から、生活科を土台とすることで、高学年での総合的な学習でより豊かで深い学びが期待できる、と考えているからである。1・2年生の生活科で同じ学習材に1年間取り組むことで子どもたちが達成感や満足感を得る体験を積んでおくことは総合的な学習を深めるうえでの大きな土台となると考えている。

(2) 戸部小学校の生活科と動物飼育

生活科の内容のなかに「動植物の飼育栽培」が示されている。本校では、学校飼育動物は

2年生が担当することになっている。(1)で述べた、本校での総合的な学習・生活科での継続的な学習活動を行ううえで、動植物は非常に適した学習材であるといえる。したがって、本校では飼育や栽培に関する委員会は設置されていない。特別活動の常時活動として動物の世話をを行うのではなく、生活のなかで、2年生が3年生から引き継いで1年間活動に取り組み、また新2年生に引き継ぐ、ということを繰り返している。つまり、6年間の小学校生活のなかで、1年間は動物飼育を全員が経験するわけである。だから、2年生が動物飼育に取り組む際に、3年生以上の子たちから飼育方法を学べたり、1年生の子は「自分たちが2年生になると動物たちの世話をするとんだ」という見通しと期待感をもつことができる。3年生から6年生まで、過去にどの学年もかかわっているので、例えば、飼育しているニワトリの1羽について「『グリ』という名前はどういう意味なんだろう?」という疑問がてくると、上級生から聞き取りをして調べていくこともできる。また、他学年の子たちも、「昔私たちが世話をしていた〇〇は…」という意識が強いので、世話をしている途中でアドバイスをくれたり全校に飼育動物についてお願いをしたり呼びかけたりするときは真剣に耳を傾けてくれる。

2 生活科でのモルモット飼育の実際

—平成20年度2学年1組の実践を例に—

(1) 単元目標

生き物の育つ場所、変化や生活の様子に関心をもって世話をしたりふれあったりすることを通して、それらが生命をもち、日々成長していることに気付くとともに、生き物に親しみをもって大切にしようとする心情を育てる。

(2) 1年間の飼育活動を通して育てたい力と、力を育てていくための手立て

○様々な生き物とかかわる中から、飼ってみたいという思いや願いをもち、進んでかかわろうとする力

○自分の飼う生き物の種類や成長に応じた世話を自分で考えたり調べたりして判断し行動する力

○生き物の飼育や観察を通して気付いたことや分かったこと、考えしたことなどを工夫して表現する力

○友達や周りの人の活動のよさに気付き、飼育活動に生かす力

○生き物とかかわる楽しさや生命を預かる責任を実感し、生命を大切にしようとする心情

↓

●育てている生き物を大切に思うことができるよう、毎日生き物とふれあう時間を継続的に設ける。

●いつでも調べたり読んだりできるように、生き物に関する図鑑や本を教室に置いておく。

●生き物の成長や変化、自分たちの飼育状況との違いなどに気付きやすいように、活動や学習の場として飼育小屋や野毛山動物園を活用する。また、モルモットの飼育ケージを教室に置くことで、日常的に子どもたちがモルモットとかかわるようにする。

●飼育についての課題や疑問等を相談できるように、野毛山動物園の飼育員やペットショップ、工務店を営んでいる保護者などと連携を取れるようにしておく。

(3) 2年1組でモルモットを飼育することになった経緯

平成20年度、2年1組ではモルモットの飼育に取り組んだ。この子たちは、1年生では生き物の飼育活動は経験していない。先述のように、本校では動物の飼育は代々2年生が担当することになっている。20年度もゴールデンウィーク明けに3年生から新2年生にニワトリとウズラの飼育方法を教わり、飼育活動がスタートした。

飼育小屋には部屋が3つあり、1部屋ずつにニワトリ、ウズラが飼育されており、最後の1部屋が空室だった。そこで、生活科の学習では、今までいるニワトリとウズラの飼育とともに、空いている部屋で飼う新しい飼育動物を決めるところから始めた。「何を飼いたい?」と尋ねると、子どもたちは目をキラキラと輝かせながら「キリンを飼いたい」「ゾウがいい」と希望を口にし、夢は広がっていった。

2年1組で動物の飼育を始めるにあたり、まず最初に協力を求めたのは、学校の近くにあり、子どもたちも頻繁に行き来できる「野毛山動物園」だった。野毛山動物園には「ながよし広場」という子どもたちが小動物とふれあえる空間がある。まず、子どもたちとながよし広場に行ってそこでヒヨコやモルモット、ハツカネズミなどとふれあう時間を繰り返しもった。子どもたちも飼育員から動物とふれ

あっていくために必要なことを学んでいった。この頃になると子どもたちも現実的な考えをもち始めるようになり、最初は「キリンやペンギンを飼いたい」と言っていたものが、ハムスターとモルモット、アヒル、ミニブタなどの身近で自分たちでも何とかなりそうな小動物に候補が絞り込まれていった。しかし、子どもたちが1年間飼育に本気で取り組み続けるためには、飼育することに決まった動物を買い与えるようなことはしたくなかった。つまり、飼育する動物との出会いをどう設定するかが大切だと考えたのである。

なかよし広場の飼育員のKさんに学校で飼い始めるにはどのような動物が適当か相談にのっていただき、その結果、次のような指摘を受けた。

①子どもたちより大きい生き物（例えばミニブタ）は子どもたちの安全確保の面で問題がある。第一、小さくていぢんかわいい時期（ミニブタであれば子ブタ）だけ飼育して、1年たって大きくなったところで、次の学年にバトンタッチするのは、動物を押しつけることになってしまうのではないか。

②小さい=温厚で飼いやすいとは限らない。ウサギやハムスターはお互いにけんかをしたり人に噛みついたりするので、学校での飼育動物にはあまり適さない。

③ウシやニワトリ、モルモットなど、昔から家畜として飼われている生き物は、人に飼われるためには必要な条件を全て満たしているからこそ家畜に選ばれた。それは現在でも変わらない。

こうした指摘を受けたうえで動物園から提案された生き物はモルモットかハツカネズミだった。モルモットは複数で飼育しても大きなけんかもなく、動きが遅いのでつかまえたり世話したりしやすこと、ハツカネズミは逆に動きが素早いので、いろいろな動きが楽しめ、ハツカネズミの遊び場がたくさん作れる、といった利点があった。そして、「モルモットかハツカネズミであれば、動物園で飼育しているものを数ひき譲渡してもかまわない」というお話をいただいた。モルモットやハツカネズミは子どもたちも「ふれあい広場」で何回か接していて、子どもたちから「飼いたい」という希望が出やすいのではないかと予想されたり、実際動物園に通い始めてからほどなく

「モルモットはかわいいから飼いたい」という意見もでてきていた。

子どもたちの話し合いも大詰めにきていた。最後にハムスターかモルモットのどちらかにまで絞り込まれていたが、どちらも決め手に欠いていた状態だった。そこで、子どもたちに「飼育員のKさんに相談してみたら?」ともちかけた。なかよし広場の飼育員のKさんは子どもたちが動物とふれあうポイントを教わったり、学校のニワトリが卵を産んだときにどうしたらいいか相談したりしていくなかで、子どもたちから絶対的に信頼されていた。教室にやってきて子どもたちの話を聞いたKさんは、少し考えたあと、「やっぱり、2年生がお世話しやすくて噛みついたりひつかいたりしないおとなしい動物がいいよ。そうしたらモルモットかなあ。モルモットを飼うなら、動物園にいるのをあげてもかまわないよ。」とアドバイスしてくれた。その後2年1組で新しく飼う生き物がモルモットに決まるまで時間はかかるなかった。ただし、ここでKさんからモルモットをもらうために次の3つの条件が子どもたちに提示された。

- ①全員がじょうずにだっこできるようになること
- ②えさに何を与えたらいいか調べて用意すること
- ③すみかをどうするか調べて用意すること

この3つの条件を全てクリアできれば戸部小にモルモットをあげよう、というのである。この日から子どもたちがモルモットを手に入れるために課題を解決していくための活動が始まった。3つの条件を無事クリアして、学校での飼育が始まったとき、子どもたちは自主的に活動できる、つまり「本気」になっていたといえる。

「モルモット」という学習材に子どもたちが本気で向き合えるように、モルモットが学習材に決まるまで、教師の側からうつてきた手だけではなくどのようなものがあったかみてみると、

①子どもたち自身が動物園のなかよし広場に何度も通うことで、「Kさん」との人間関係をつくり「モルモット」についての理解を深めていったこと。

②最後に何を飼うか決めるところで、「今度二

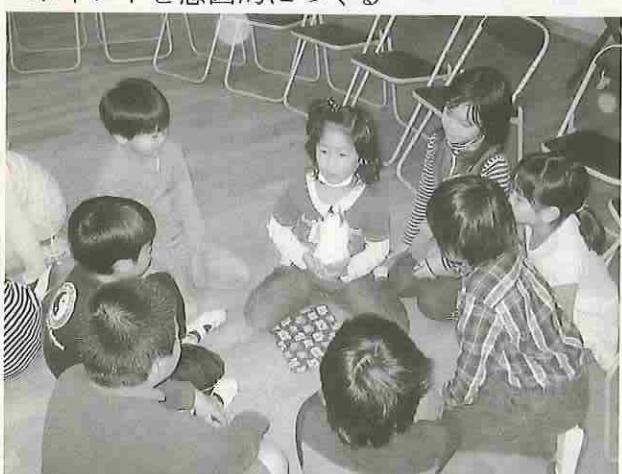
ワトリの飼育をKさんがチェックしに来るから、のときに相談したら？」ともちかけ、Kさんに「教室にきてもらってモルモットを薦めてもうると同時に、「動物園のモルモットを譲渡してもいい」という話を出してもらったこと。

③モルモットをただもらえるのではなく、3つの条件をクリアすることでようやく自分たちのものになる、という「壁」を設定したこと。

の3点があげられる。これらの手立てをうつに際しては、Kさんとの綿密な打ち合わせを行ったうえで子どもたちに提示した。あくまでも、子どもたちが「自分たちで決めたんだ」という気持ちで学習材と向かい合い、活動を始めていくことが大切である、と考えた。

(4) クラス全員が「本気」で1年間活動を継続していくための手だて

★1年間の展開を見すえながら、ターニングポイントを意図的につくる



1年間モルモットを飼えば、それだけで学習が成立するわけではない。1年間というのは子どもたちにとっても非常に長い活動期間である。子どもたちが飽きてしまう可能性も多い。マンネリ化してしまって、飼うだけで終わってしまうこともあり得る。子どもたちがどうすればいいのか悩む場面や全員で問題を解決させていく場面が何回もないと子どもたちの活動意欲も続かないし、継続することの大切さを学ぶだけの1年間になってしまう。こうした意味で、子どもたちが真剣に向かい合う問題解決の場面（子どもたちがぶつかる壁）は是非とも必要だし、これを複数回設定するためには、教師がしっかりと見通しをもって活動計画を進めていかなければならない。

今回の活動で、教師が全く想定していなかつたできごとが2つあった。1つ目はモルモットの1回目の出産である。モルモットの飼育がスタートしたときは、子どもたちはもちろん、動物園の飼育員も教師も、3匹のモルモットは全てメスだと思いこんでいた。しかし、夏休み中に1匹のモルモットのお腹が大きくなっている、1回目の出産があった。夏休みが終わって学校にやってきた子どもたちに「この赤ちゃんモルモットどうする？」と問い合わせたところ、飼育開始から2か月が過ぎていたことで自信がついたのか、全員が「飼いたい」「だいじょうぶ、飼える」と答えた。そして10月には2回目の出産をむかえた。このときにはモルモットの数が産まれた赤ちゃんも含めて8匹になっていたこともあり、子どもたちも悩んだ。長い話し合いの末、子どもたちが出した結論は、「世話が大変になるかもしれないけど、自分たちが飼っているモルモットがキーキー鳴きながらがんばって産んでくれたものだから飼い続けよう」ということになった。

2つ目は10月のモルモットの死である。動物の死は教師でも意図的につくりだすことはできない。しかし、死が訪れるであろう可能性を考えて、それを「学びどころ」につなげていくような指導計画は事前に立てておく必要があると思う。

モルモットとの出会いから別れまで、その間に命名や学校全体への紹介、飼育設備や体制の整備、実際の世話やふれあいなど、子どもたちがクリアしていかなければいけない課題はたくさんある。それに加えて、この学習材と1年間かかわっていくなかで、どんな活動が考えられるか、そしてそこからどんなことが学べるかをよく吟味して、計画的な学びをつくりだしていくことが重要である。また、そのためには、途中で起こった予期しないできごとも、子どもたちの学びに発展させられるように教師が手だてを考えていくことも大切である。

★人との継続的なかかわりをもつ

学習活動のなかから、次々と疑問や課題が生まれる。子どもたちはどうしたらいいか相談にやってくる。しかし、解決方法を教師から聞いて実行して問題解決、ということにはしたくなかった。人かかわっていくなかで学ぶことは大切だが、担任から学ぶことは他にも



たくさんある。飼育については、その道のプロから学ぶのがいちばんいい。そこで、活動中に問題が起きたり、疑問に思ったことがあるときには、野毛山動物園の飼育員のKさんに相談することにした。動物園に行くたびに、Kさんから、モルモットのだっこのしかた、えさの与え方、夏のシャンプーのしかたなど、細かな飼育方法を実際に教わりながら継続的にかかわっていくなかで、子どもたちはKさんへの信頼を深めていった。「何か困ったことがあったら、Kさんに相談しよう」という雰囲気も子どもたちのなかに生まれ、「Kさんがこう言っていたから…」「これはKさんに報告したほうがいい」と、子どもたちは、Kさんとの約束やアドバイスを実行しながら飼育に取り組むようになった。

また、学習上、重要なキーワードをKさんの口から語ってもらうことで、次の「学びどころ」にむけた布石をうつこともあった。例えば、「そろそろ寒くなってきたなあ。モルモットは寒さに弱いんだよなあ…」とつぶやいてもらい、そろそろ冬に向けた準備が必要なことに気づかせたり、モルモットを譲渡する際の3つの条件の提示や、3つの条件がクリアできたかどうかの判定をKさにしてもらうことで、他の人とかかわっていくなかで、「自分たち自身の手で壁を乗り越えられた」という意識をもたせることができた。

★「自分の○○」を用意する

本来は1人ひとりが責任をもって自分のモルモットを育てさせたかった。しかし、モルモットを1人1匹き飼うことは物理的に不可能である。しかし、学級全体の活動を個人に落としていかないと「何人かの子ががんばる飼育活動」になってしまいかねない。そこで、

1人ひとりが責任をもって飼育活動に取り組んでいくための「象徴」として、モルモットフードをホームセンターに行って1人1箱買ってきて。自分の箱から出して与えることで「自分のえさを食べてモルモットが生きている」という意識をもつことができる、と考えたのである。

野毛山動物園に行くときにも、クラスで「モルちゃんバッジ」を作って、一人ひとりがつけていった。これは、校外学習で行くときだけでなく、休日や放課後に動物園に行ったときについている飼育員から「戸部小の子だね」と声をかけられて、いろいろなことを教えてもらったり、体験をさせてもらったりできるのである。子どもたちにとっては、「動物園と私たちとは特別な関係」という気持ちが生まれ、動物園（飼育員）との意識的なつながりが深くなるきっかけとなった。

★活動の日常化を図る

始業前、モルモットのケージは1階の職員室前に置いてある。これを登校した子たちが3階の教室に運び込むことで朝の活動が始まる。えさ入れの中は朝ちょうど空になるように量を調整してある。教室にケージを持って上がった子どもたちはモルモットのえさ入れにモルモットフードをいっぱいにする。授業が終わると、また職員室前まで持って行く、という毎日を繰り返す。これは子どもたちにとってモルモットとの1日の始まりと終わりで行う儀式のようなものであった。モルモットの数が最終的に7ひきに増えてから、飼育当番は、ニワトリ当番も含めて2日に1回の割合でまわってくるようになった。飼育当番は基本的には休み時間に行うため休み時間は無いに等しかったが、子どもたちは黙々と仕事をしていた。仕事は数多くあったので、子どもたちは1日に1つは何らかの形でモルモットにかかわりをもった。「朝から帰るまでモルモットの世話をするのは自分たちだけ」という意識を毎日何らかの形でかかわることで責任感を継続させることができたのである。

★ターニングポイントでは全員で話し合って決める

飼育動物の決定、命名、モルモットの出産や死、2年生が終わったらモルモットをどうするか、などは学習のなかでもとくに大きな「学びどころ」である。こうした「学びどころ」では、必ずクラスで話し合いをもち、全員で

共通理解しながら学習の方向性を決めていった。こうした学習のターニングポイントでの話し合いはとくに重要である。こだわりをもつ子どもの意見がぶつかりあうのでなかなか決まらないことが多い。時間はどんどん過ぎていくが、最終的に、多数決や教師の鶴の一声で決定したくはない。そこで、時間がかかるとしても、全員が納得するまで話し合った。自分たちの思いや願いと、「それは本当にモルモットの幸せになっているのか?」「自分たちは本当はどう思っているの?」「他のクラスの人たちはどう思っているのか?」といった疑問とのぶつかりあいのなかで、子どもたちは自分の気持ちを出し合い、結論を導き出していったのである。全員で決めたことなので、その後の子どもたちの活動への意識は高かった。

3 まとめ



1年間、モルモットの飼育に子どもたちと一緒に取り組んでき感じたことをあげてまとめにしたい。まず、学習材について教師自身がよく知ること。私は4月に2年生の担任になるまで、モルモットをさわったことが1度もなかった。モルモットについては、いろいろな本を読んだり、毎週のように動物園に通って実際にさわって観察したり、飼育員から教わったりした。本によって書いてあることが異なっていることもあった。モルモットについてよく理解することで、目の前に起こっ

た課題について、今すぐ解決しなければならないことか、動物園に行ってKさんに相談するべきことか、経過を観察していればだいじょうぶなことか、判断することもできた。

また、施設や専門家と連携する際にも、こちらの意図を伝え、綿密な打ち合わせを欠かさないこと。これは、お互いの意図をすり合わせるとともに、子どもたちに何を学ばせたいかを共通理解することでスムーズな活動を開発したり、お互いに任せきりにしないようにするために大切なことだと思われる。

最後に、こうした手立てを、子どもたちの思考の流れから外さないように提示していくこと。活動中に子どもたちが話している内容から、「これは学びどころになるのではないか?」と考えて新たな学習課題にしていったこともあった。生き物は、子どもの目の前に具体的に存在するものなので、子どもにとっては取り組みやすい学習材である。しかも、常に世話をしていないと死んでしまう。しかし、いくら子どもたちにとって魅力的な学習材であっても、ただ飼い続けるだけでは、子どもは本気にはならないし、意欲も長続きしない。教師の長期的な視点に立った継続的な働きかけにより、子どもたちがそれを切実感のある課題と考えて向かい合うことで、1年間の学びを豊かなものにするできる(子どもにとっては達成感が得られる)のである。それだけに、教師が子どもの活動時間以上に時間をかけて、飼育動物について知り、学習活動に見通しをもち、そのために必要な施設や人とのかかわりをつくっていくことが重要だと考えている。

(横浜市立戸部小学校教諭)

【引用文献】

横浜市立戸部小学校 「研究紀要 第34集」
(2007) 11-22

